

『真実』 *Vérité* におけるゾラの教育思想

—いかにして「真実」に到達することができるか—

Zola et l'éducation dans « *Vérité* »

—Comment peut-on arriver à la vérité?—

橋 本 政 子

Masako HASHIMOTO

はじめに

ゾラはその生涯において、「マネ擁護」や、『居酒屋』をはじめとする『ルーゴン＝マッカール叢書』の数々のベストセラー小説をとおり、しばしば世論にセンセーショナルな影響を与えてきた作家である。1902年、ゾラの最後の作品となった『四福音書』の第三巻『真実』の執筆が終わり、9月10日から『オロール』紙にその連載が始まったが、その連載開始の18日後、ゾラはメダン滞在を終えてパリに帰宅した後、一酸化炭素中毒事故で急死した¹。『四福音書』の第四巻にあたる、次の作品『正義』の執筆準備中であつたが、三枚の準備草稿だけを残し『正義』は未刊となった。前シリーズ作品『三都市叢書』が「古い世界の総括」と捉えられるのに対し、『四福音書』は「新しい世界の実施」という位置づけである²。『四福音書』は1897年、ユートピアのためのゾラの福音書として構想され、13枚の準備草稿が書かれたが、その最初の時点では『真実』は予定されていなかった。しかし同年、ドレフュス事件に関与し始めたゾラは、事件を自ら経験することにより、この事件を反芻し、問題点を突止め、事件の教訓として、ユートピアを記す福音書の中にこれを小説としてどうしても差し挟む必然を感じ、第二巻『労働』の後へ、小説化して残したのではないかと思われる。

『真実』の舞台設定を教育界にしたのは、ドレフュス事件を通し、フランス国民としての道義とは何か、ユートピア社会を創出するには、まず「人間性」つまり「真実」を求める人間を育てる必要があり、そのためには「教育」が最も大切であることを感じたからではないだろうか。つまり政教分離された社会の中で「知るということを知る」人間を育てること、即ち科学を基にした「真実」を求める人間、科学を知り全てを知るといふ、科学への信頼が「人間性」を作ることであると考へ、「真実の種」を蒔き、育てるといふ教育精神とその実践を描きたかっただのではないだろうか。本稿では、これらの問題点を同時代の幾世代かの人々の変遷を描きながら、共和国の理想社会を予測しつつ、素材となったドレフュス事件の時間の枠をはる

¹ 暗殺説もある。アラン・パジェスは暗殺を告白したとされるアンリ・ブロンフォスに関する調査をし、その経過を本に記しているが、物質的証拠は残っていない。Alain Pagès, *Émile Zola, De l'accuse au Panthéon*, Lucien Souny, 2008, pp.269-291.

² ZOLA, Émile, *Fécondité*, 1899, In Zola, Émile, *Œuvres Complètes*, tome 18, Mitterrand Henri(s.l.d.), Nouveau Monde, 2008, p.15. この全集は *ŒCNM* と省略し、ここからの引用は以後巻号とページ番号のみを記すこととする。日本語訳は執筆者による。

かに超えた歴史の延長線上に、ゾラが描きたかったユートピアとも関連させて検証していきたいと思う。

第1章 ドレフュス事件の置き換えとしての『真実』

1-1. ドレフュス事件と『真実』の中のシモン事件との共通性

1894年、裕福なユダヤ人家庭に育ち、軍部においても順調な昇進を遂げていたアルフレッド・ドレフュス大佐は軍の機密をドイツに売ったという罪をきせられ、軍法会議により有罪判決をうける。突然ドレフュスを襲ったこの事件は、根強い反ユダヤ主義の歴史のうねりと共に、無罪の一軍人が機密重視の閉鎖的的社会である軍部の陰謀にはまり、位階略奪という大きな屈辱を受けて軍を追放され、スパイ容疑の罪で無期懲役の判決を受け、悪魔島に送られるという一大事件に発展する。この事件は多くの人々の関心を集めて社会問題ともなり、フランスをドレフュス派と反ドレフュス派とに分断し、激しい論争や対立を引き起こす結果となり、両者の溝を大きくした。ドレフュスの兄、マチユは、弁護士のラボリと共に、弟アルフレッドの無罪を信じ、潤沢な経済力を使い冤罪を晴らす為に奔走するが、そのやり方は軍に配慮しつつ慎重であった。『反ユダヤ主義に抗して』の著者で若き詩人ベルナル・ラザールもこの事件に最初から関与し、反ユダヤ主義的人種差別による冤罪を、作品『誤審』に記し、広く社会に訴えようとするが、ドレフュスの弁護士と兄に出版を引き止められるなど、ドレフュス救済は慎重かつ戦略的な手法で進められた。

ゾラはドレフュス事件終結直後には、事件についての小説や劇を書くことは決してないと述べていた³。しかし、その考えは変わった。1901年のサントン氏への書簡の中で、ゾラはドレフュス事件という歴史的事実を転換した小説を執筆したいとする旨を述べている⁴。そしてドレフュス事件という歴史的事件は、全く別な物語へと転換され、小説化される。転換された小説の中で、ドレフュス事件と、小説におけるシモン事件は細かい点にまで照応が認められる。照応関係は次の通りである。

ドレフュス事件

1. ユダヤ人で陸軍大佐のアルフレッド・ドレフュスがスパイ容疑で逮捕される。
2. 証拠品として、六つに引き裂かれた明細書 *Bordereau* がごみ箱から押収された。
3. 証拠物件の鑑定結果の不確かさ。ドレフュスの弁護士ラボリが鑑定を依頼した人によると、明らかにドレフュスの筆跡と照合しないという結果があった。
4. 裁判手続きにおける違法行為。1894年の軍法会議の際、最終審査のため判士たちが引きこもった部屋において、当時の陸軍相メルシエ将軍が彼らだけに秘密文書を示すという違法行為をした。その文書を見て、無罪に傾いていた判決が土壇場で覆された。
5. ドレフュスに下された判決が棄却され、レンヌで再審が行われた。しかし結果は再度有罪判決であり、その後、特赦により放免された。
6. 弁護士ラボリとドレフュスの兄マチユの冤罪を晴らす為の活動は長年にわたる継続的なものであった。
7. 事件は閉鎖的であるフランス陸軍内部で起こり、利権に絡む陰謀が起き得る体質をもち、「人間性」の論理は通らない世界であった。

³ ZOLA, Émile, *Vérité*, 1902, *ŒCNM*, 20, 2009, p.15.

⁴ Zola, Émile, *Correspondance*, tome X, Les Presse de l'Université de Montréal, 1995, p.302. 1901年8月6日、アメリカでの出版契約についてのサントン氏への書簡では、次の作品『真実』が『労働』以上に成功を取めるであろうと伝え、その理由として非常にドラマチックな作品であること、全世界に衝撃を与えたドレフュス事件の転換であることを述べている。

『真実』

1. ユダヤ人の小学校校長シモンが、甥のゼフィランを殺害したとする容疑で逮捕される。
2. 猿ぐつわとして被害者の口に押し込まれていたと思われる学校仕様の特殊な用紙が発見される。この証拠品は花押が押され、右端はちぎりとられていた。
3. 信憑性の低い鑑定士の証拠物件の鑑定結果。
4. 陪審員たちが集まり、判決を討議して決める部屋に、グラニョン裁判長が現れ、シモンに関する書類を見せるという不法な行為を行い、無罪を覆す結果となった。
5. シモンへ下された判決が棄却され、ロザンで再審が行われた。しかし結果は再度有罪判決であり、その後、特赦により放免された。
6. 弁護士デルボワとシモンの兄、ダヴィドによる、冤罪を晴らす為の活動は長年にわたる、継続的なものであった。
7. 事件は閉鎖的な宗教界で起こり、利権に絡む陰謀が起き得る体質をもち、「人間性」の論理は通らない世界であった。

1-2. 置き換えの意味

ゾラが実際ドレフュス事件への介入を決めたのは、ドレフュスが軍法会議で有罪判決を受けた後、三年経ってからであった。証拠品である明細書を書いたのは、エステラジー少佐であることをピカール中佐がつきとめる。ピカール中佐の友人である弁護士ルブローアからその事実を知らされた、フランス上院副議長、シュレル＝ケストネールは、知人の銀行家カストロにその筆跡鑑定を依頼してその事実を確認すると、ゾラはドレフュス問題でシュレル＝ケストネールを紹介され、この司法の間違いの解決協力を依頼される。それ以降、ゾラはドレフュス事件に関し、新聞に多くの論説を発表し、広く多くのフランス国民に、言語で訴える戦略を実行している。それらの定期刊行物に発表した記事は『前進する真実 (*Vérité en marche*)』として、1901年2月にまとめられ出版されているが、この小説の表題もそこから来ていると思われる。ユダヤ人故に、無実であるドレフュス大佐が濡れ衣を着せられるという、理不尽な社会の不正に対しゾラは怒り、立ち上り、アンガジュマンしていったのである。真犯人と目されたエステラジー少佐に対し、軍法会議はすぐに無罪を宣告する。この軍部の対応に対し、ゾラは大きな失望と怒りを感じ、1898年1月13日の『オロール』紙に『私は弾劾する』という記事を掲載する。軍部の不正、またそれに加担する政治家の陰謀を広く世論に訴えることにより、大きな反響を得る狙いであったが、法廷はこの記事を取り上げることなく、逆に軍法廷を侮辱した名誉棄損で、禁固一年罰金3000フランの判決をゾラは受ける。意図した世論へのインパクトに対する肩透かしをくわされたゾラは失望し、「逃亡より牢獄を！」と下獄を望むが、今後の戦いが不利になると判断した弁護士や友人の指示により結局、ロンドンに亡命し、沈黙を守ることを余儀なくされた。

それではなぜゾラは沈黙を破って『真実』を書いたのであろうか。それは「司法の間違い」を真実として認めず、事実を消し去ろうとする国家権力を担う軍部や政治家たちの意識や行動の現実、またそれに迎合する民衆の考え方に接し、ゾラの思い描くユートピアからは乖離していると感じ、ユートピアを実現するための前提として、「真実」を求める人間の精神を作りあげるには「教育」であるということに着目したのではないかと思われる。ゾラの考える理想社会の構成要素である人間をどのように教育していくのかが重要であると感じ、最初は予定されていなかった『真実』を差し挟む必要があったと思われる。ドレフュス事件で体験したフランスの現状に失望し、真実を求める、科学を基にした教育が必要であり、それには子供の時に受ける教育こそ正しく導く必要があり、また家庭で影響力を持ち、男性の共同者である女性の教育も科学的で正しくなければ、良き社会、良き未来は創造できないのではないかと感じたからであると、と思われる。ベアトリス・ラヴィールの述べる、現実への失望が「発散」*émanation* としてこの小説

の原動力になっているのではないかと考えられる⁵。

ゾラはドレフュス事件を素材として筋書きにオーバーラップさせながら、この実験的経験の教訓をフィクション化し、ドレフュス事件の「司法の誤り」がどのように展開されたかを、『真実』のシモン事件の内ではのめかしている。その『真実』は1901年4月準備草稿を開始し、1902年8月に脱稿した。シモン事件が筋書きの中心に置かれ、また主人公が行う「教育」により変遷していく「人間性」は、主人公マルクが三十歳から八十歳を過ぎるまでの五十五年間に亘り、四世代が描かれ、この事件は波及する。これは、ドレフュス事件の時間を大きく超える時間であり、取り組んだ「教育」が創る成果を俯瞰的に見て、未来を予測したものである。マルクの生き様を時間軸に、教育はどう変わっていき、人をどう変えていくのか、そして、その先にあるゾラの思い描く理想社会にどう結びつくのかを見ていきたい。小説の舞台を軍部ではなく、教育界に置き換え、全く異なる視点で問題提起をし、この事件を再構築することによって、ゾラの未来社会への希望を繋いだのでないかと考えられる。

第2章 『真実』の主人公マルクと公教育

2-1. マルクの教育理念と社会に対する闘い

「ゾラが教育的問題の悩みの中で、時事問題に密接にかかわり、激戦に身を投じることになるのは、ドレフュス事件の後でしかない⁶」とベアトリス・ラヴィールは述べているが、ジュール・フェリー法（1881年、1882年）にもかかわらず、実際の社会における教育状況は三十年來の教会や修道院による宗教教育による影響が大きく、公立学校における教育はまだ定着していなかった。そのような中、ゾラに教育界の情報提供をしていたのは、後に、1905年の政教分離法の立案に携わることになる、フェルディナン・ビュイソンであった。そして、公立小学校の内情に関しては、オロール紙の記者であったレルミットが、ゾラに若き小学校教師ドーヴェを紹介する。ドーヴェは教育界における教師たちの物質的精神的悲惨さや、また思想による差別により左遷や免職を余儀なくされる教師の厳しい現状を本に執筆して訴えており、ゾラに対してはその嘆きを世論に広く訴えてくれることを願い出る。しかしゾラは『真実』の中で、この公立学校の教師たちの厳しい現状を素材として筋書きの中に取り入れはしたものの、逆に、「真実」を求める人間性を創り伝えていく、教育を使命とする主人公に仕立て、懸命に教育理念に向き合い前進する教師の叙事詩にしたのである。

ゾラは実際、ドレフュス事件にアンガジュマンしながら、真実を真実として認めない共和国の現状に何度も失望し、その度に国家の司法や政治家に「真実」を求め、文筆による闘いを続けてきた。そして啓蒙主義からフランス革命を経て社会進化を遂げながら作られてきた栄光あるべき共和国の現実に幻滅し、ゾラが思い描くユートピアに求められることは、真実を真実として受け入れないこのような現状を変えることであり、国を構成する正義の可能な人間の育成を行う為には、「教育」が重要であることを確信し⁷、小説の主人公を小学校教師として造形する⁸。特に社会的な人格形成の基礎である初等教育に携わり、「人間性」を育てるには、科学を基にしたライクな学校教育が重要であると考えた。ゾラは準備草稿の中で次のように述べている。

⁵ Béatrice Laville, *L'Écriture de l'utopie, Zola à l'œuvre*, Presses Universitaires de Strasbourg, 2002, p. 233.

⁶ Béatrice Laville, *Pour Vérité. Histoire d'une rencontre : Zola et Dauvé*, Les Cahiers Naturalistes n.64, 1990, pp. 173-180.

⁷ Zola, Émile, *Correspondance*, tome X, Les Presses de l'Université de Montréal, 1995, p.259. ドレフュス事件で共に闘った人権連盟の同志達に、ゾラは教育だけが過去の教義や君主体制を壊し、人々を解放し、健康で正直に生きる力を与えるものであると書いている。

⁸ ゾラに教育界の情報を提供したフェルディナン・ビュイソンは、後の宗教系学校廃止の法案立案者であった。

ものの考え方を変えること、全ての人に実験的方法を与えること、そうすれば直ちに正義は可能となる。したがって、このような例〔ドレフュス事件〕の後で絶対必要なことは、根本から社会を再構築すること、それには教育を重視し、教育の普及を最も急がれる仕事にすること。その事なしには、より幸福な未来は実現できないであろうような営為にすることである⁹。

ゾラの代弁者である『真実』の主人公マルク・フロマンは、公立小学校の教師であり、教育に燃える生来の教師、「真実」への目覚めを人格形成の基礎である小学校教育の中で行おうとする、「真理の種」を播く教育者として描かれる。

マルクは論理と光明の精神の人である。彼にある明快で確固たる理性には、全てが確かさの上に基本が置かれることが必要であった。そこから、真実に対する彼の絶対的情熱が生まれて来ていた。彼の眼には、確かさの上には、いかなる平穩も本当の幸福もなく、そのようになった時、彼の中では、確かさは完全なものとなり、最終的で、決定的なものとなる。彼は偉大な学者というわけではなかったが、知っていることをさらによく知ろうとし、真実を所有していること、永遠に獲得された、一つの実験的真実を所有していることを、もはや疑おうとしなかった。疑惑が消えると同時に、彼の苦しみは止み、とても陽気に、とても元気になり、次には、それを他の人に教えるという情熱、皆の頭脳や心にもその真実を入れ込ませるといふ情熱が同じように付け加わった。そんな時、彼の類まれな才能が発揮され、万事を単純化し、類別し、その明晰さですべてを満たす手法をもたらすのだった¹⁰。

教育に情熱を持ち、全てが確かさの上に基本が置かれる科学、つまり「真実」を教え、子供たちに真実の芽を育てていくという使命を担うマルクは、神を絶対者として教育を行う宗教学校の教育とは異なり、科学を基にする真実、明証を重視し、その考え方を人々に伝え広めるという役目を割り当てられる。

貧弱で、目覚めていない知性の者への愛が彼の人生を決めた。また、その地味な職務の中で、彼の真実に対する情熱は増してくるばかりで、段々抑制し得ないような欲求にまでなった。真実とは彼の健康や生きること自体になり、この真実への欲求を満たしてのみ、規則にかなったいつもの生活を送るのであった。もしそれが真実を得られなくなると、彼はとても悲嘆にくれ、不安になり、他の人に真実を教えるために、真実全体を自分のものとし、直ちに獲得する必要性に苛まれて、もはや生きている心地もしなくなり、さもなければ精神的にもまた肉体的にさえも激しい苦痛の中で日々を送ることになったのだった¹¹。

ゾラは小説の主人公として造形したマルクに、自分自身の歴史観を踏まえた共和国の理念を教師として人々に伝えていく強い意志を付与しているが、その教育に対する信念は物語を通して一貫している。

しかし、教師としてのマルクにとって、現実には多くの壁が立ちはだかる。十九世紀末の社会情勢を鑑みると、近代化の中であって、様々な分野に変化が起こり、生活様式も進化しつつあったが、フランスの隅々に至る全ての国民にまで、モラルや公民意識などの精神的な進展や向上が見られるとは言い難い状況であった。

ではそのような状況の下で、公学校教師のマルクに立ちはだかる壁とはどのようなものであったかを見

⁹ ZOLA, Émile, «Ébauche», *Œuvre, manuscrits et dossiers préparatoires. Les Évangiles. Vérité*. Bibliothèque nationale, manuscrits, NAF 10343, f^{os} 305-306.

¹⁰ ZOLA, Émile, *Vérité*, 1902, In Zola, Émile, *ŒCNM*, 20, 2009, p.30.

¹¹ *ŒCNM*, 20, p.40.

ることにしたい。

2-2. 民衆の壁

まず、最初の壁としてあげられるのは、一般民衆の無知である。十九世紀後半、急激に増加する労働者やプロレタリアートである民衆は正義に対して非力であり、真実を求めることへの不可能性が描かれる。主人公マルクは、殺害事件の容疑をかけられている友人で、ユダヤ人教師シモンの無罪を証明するために、犯行に使われたと思われる証拠品の用紙が、実際シモンの学校で使われていた用紙であるのかどうかの証言を得るために、シモンの生徒の家を尋ねるが、マルクがそこで遭遇した親たちは、一切事件に関与しようとせず、わが身を守ることばかりを考える人々である。マルクは自分の子供たちの先生であるシモンが嫌疑をかけられ窮地にあるにもかかわらず、真実に目をむけようとしない民衆の実態を見て失望を抱き、闘わなければならないのは、民衆の無知であることを覚るのである。

マイユボワの町への帰途に着きながら、この若い男は悲しい心持ちで考えた。彼はたった今、無知の厚い地層、盲目で耳の聞こえない、まだ大地の眠りの中でまどろんでいる、巨大な塊にぶつかったところだった。ボンガール家の人々の後ろにある、この田舎の大きなかたまりすべてが、こんなにもスピードを遅らせられた覚醒をしながら、相変わらずかたくなに不明瞭な植物状態にあったのだ。人を最終的に、真実や正義の民衆として生まれさせたいならば、教育しなければならないのは、この民衆全部であった¹²。

マルクは事件に関連し、遭遇した親たちを通し、フランス一般民衆の現実を見る。そこに横たわるのは無知とエゴイズムであり、真実を隠そうとする沈黙であった。それがフランスにおける民衆の現状であった。

ゾラは、真実に目覚めていない民衆を、準備草稿に次のように書いている。

(中略) 私の描く農民の背後には、私の労働者の背後と同様に、巨大な労働者、農民の大群がいることが必要だ。彼等は見本に過ぎないだろう。それをより感じさせるためには、町からあまり遠くない、奥まったところにあるこの田舎の片隅のようなところ、小高い丘に閉じ込められた田舎、或いは他のところでもよい。ただし無知にとらえられたところであり、人のほとんど訪れることのないところにすることもできるだろう¹³。

ゾラはフランス国民である同時代の民衆を、地理的空間や職業などの社会環境により三つのパターンに分け、実験的な観察を行っている。農民ボンガール、労働者ドロワール、小役人サヴァンを民衆の典型として登場させており、教師としてのマルクの三十歳から八十歳過ぎまでの時間の経過とともに、小説に何度も登場させており、時系列的にも彼らの真実に対する考え方や態度の変化が表出される。そして親、子供、孫、ひ孫と新しい世代になるほど、少しずつではあるが、新しい公教育により、真実や正義が可能になっていくのを示す。

三つのパターンの一例目は農民であるボンガールであり、シモン事件への対応を通し「無知」の典型として取り上げられる。

¹² *ŒCNM*, 20, p.50.

¹³ «*Ébauche*», *Œuvre*, manuscrits et dossiers préparatoires. *Les Évangiles. Vérité*. Bibliothèque nationale, manuscrits, NAF 10343, f°377.

ボンガールになると、生の物質まで下がった。正義などわかるのは不可能だった。何故なら何も知らないし、何かを知りたい気持ちも皆無なのだ¹⁴。

「知るということを知らない」人間、人間性以前の物として提示される。

二例目は労働者である石工のドロワールである。労働者であるが、兵役も務めており少しは人生を知っていると思われたものの、この事件に政治的な事が絡んでいるとの妻の判断で、一切関りを持ちたくない妻の意見に夫ドロワールも流されて同意し、司法の間違いを訴えるための証言の協力を拒否する。彼等のエゴイズムにマルクは落胆するのである。

しかしまだ何というぼんやりとした曙であろうか。そして愚かなエゴイズムの中を通り抜け、手探りで進まなければならないとは、なんとという遅々とした歩みであろうか。そして可哀想な人々を支える団結力もないとは、なんと悲惨な誤りであろうか。彼等がより幸福でないとするれば、それは彼等がまだ公民としての生活の条件を完全には知らないからであり、自分自身の幸福のために他人の幸福もまた必要であるということを知るべきなのだ¹⁵。

教育において、人間性を進展させるためには博愛の精神、また良き社会の構築には団結力が必要であり、他人の幸福も延いては自分自身の幸福を作っていることを理解していないとマルクは感じる。

三例目は勤め人であるサヴァンである。地方税務署の書記であり、建前は共和派で反僧侶派であるが、信念はなく、自分の利益だけを考える日和見主義者である。

…彼の悲嘆が吐露され、それから声を落として密かに怯えて言った。「僧侶たちの方がより有力だから、やはり彼等の方に付く方がいいのです。」マルクは憐れみさえ感じた。それ程、その貧者はひ弱で、怯え、凡庸さと愚鈍さに取りつかれた憐れむべき存在に見えた¹⁶。

低給与で生活する無産階級のこの書記は、我が身を有利な方に寄り添わせ、権力におもねようとする。このような譲歩が全ての進化を妨害する既存権力を補強することになるのだ。犠牲者である者が墮落し、無感覚になり、疎外される時、進歩は不可能に帰すのだ。

ゾラの考えを代弁する主人公マルクの「教育」の使命は、この民衆の無知から始まり、五十五年もの間、教育への取り組みが続いていく。民衆たちも、親たち、子供たち、孫たち、ひ孫たちと世代が変わっていきながら、時間の流れに伴い、人間性やモラルが進展していき、またシモン事件の流れである、判決、判決棄却、再審、再び有罪宣告など、事件の経過に沿いながら表出されていき、マルクの教育成果の変遷も浮かびあがる。親たちは時間経過に拘わらず、相変わらず偏狭な精神のままであり、次の世代の子供たちはその両親たちより少しは進歩していて、向上心もあり、理解力もついていくが、シモン事件に関しては、まだ偏見がみられ、マルクは友愛に欠ける態度であると彼らを論すが理解は得られない。

¹⁴ *ECNM*, 20, p.50.

¹⁵ *ECNM*, 20, p.52.

¹⁶ *ECNM*, 20, p.54.

このように苦しい努力を続けるマルクであったが、結果としてはほんの少しだけの効果しか得られなかった。汚され、墮落しきっている民衆を自由と自覚とに導くために、小学校教師はどれほどの労苦と献身的行動をしなくてはならないのか、人間性を身につけさせる教育という「事業」を遂行するには、まだ幾世代も、歳月が必要であることを、ゾラは示すのである。

しかしユートピアを目指すゾラにとって、マルクの事業の対象である子供は、未来を体現するものであり子供たちの中には、マルクの理想的未来を描くメッセージをしっかりと受けとり、真実を理解し、到達する子供も出てきており、マルクの教育の結実として提示される。教会の近くで文房具店を営んでいるアレクサンドル夫人の息子セバスチャンのケースを見てみたい。

2-3. 真実を告白する子供

シモン事件において、証拠品であるイニシャルの花押の押された学校仕様の用紙は、犯人を特定するうえで重要なものである。その用紙がシモンの学校で本当に使われていた用紙なのかどうかの証言を得るために、マルクは奔走するのだが、親は皆、子供に尋ねることさえ拒否する。しかしアレクサンドル夫人の息子セバスチャンは、その用紙を従兄のヴィクトールが教会学校から勝手に持ち出し、持っていたと、七歳の時にマルクに告げる。しかし文房具店の共同経営者であるヴィクトールの母親エドワール夫人やヴィクトール自身の圧力により、この情報はもみ消され、セバスチャンは用紙のことは知らないと言証を変え、数年後、マルクの生徒として、真実の教育を受け成長したセバスチャンに、教室で事件が起こる。フェルナン・ボンガールの帽子が教室内で切られ、罪を問われたオーギュスト・ドロワールは白を切る。結局そのオーギュストが嘘をついたことが分かり、マルクはこの機会を利用して、虚偽の罪をきつく糾弾する。マルクが非常に熱心に諭したため、オーギュストさえ泣きだしマルクに許しを乞う。その時皆が去った教室で、絶望したような表情をしながら、セバスチャンはマルクに真実を告白する。

「先生、私は先生に嘘をつきました。それが大変悲しいのです。」

「(中略) その用紙はヴィクトールが僕にくれたものでした。修道士たちのところからそれを持ち出したことに彼は不安になってきて、自分で持っていたくなかったからです。それで、あなたにそれが何のことかもわからないと言ったあの日に、僕は自分のノートにその用紙を隠したところだったので。」

呆然としてマルクは聞いていた。それはシモン事件の再燃であった。眠っていたように思われた眠りから一気に立ち上がったのだ。マルクは自分の震えを隠そうとした。それは彼が深く揺さぶられる感動の震えであった¹⁷。

マルクは虚偽を言うのは良くないこと、嘘を言う者は不幸を招くことを常に説き、教育してきた努力の結果であったのだが、この告白によって得られた証拠品の用紙は、シモン事件の再審を決める物証の一つとなり、『真実』の筋書きの大きな転換点の一つとなっていく。

このように、マルクは科学を基にしたライクな教育を、押し進めながら、教師を続ける。同時代の教育状況は、ジュール・フェリー法で義務教育やその無償化、男女すべての子供達の公教育が制度化されてはいたが、実際には既存の宗教学校の影響力はまだ強く、公教育学校は生徒数でも、また教育内容でも激しく宗教学校と競合していた。マルクはライクな教育を掲げ、師範学校校長サルヴァンと共に、新教育を押し進め続ける。

しかし、教育がなされるのは学校においてだけではない。学校や制度を変えるばかりでなく、子供の場

¹⁷ *ECNM*, 20, p.134.

合、家庭教育もまた重要であると考えられる。そこでは母親が主役となる。

では、マルクの周囲に生きる女性たちは真実をどのように受けとめ、認めていたのだろうか。第3章では男女が別々に教育を受けていたこの時代に、マルクの妻ジュヌヴィエーヴの生きる軌跡をたどることにより、信心深い家庭に育ったジュヌヴィエーヴが、夫マルクと熱心な信者デュパルク夫人や母ベルトラン夫人との間を逡巡しながら、最後はどのように真実に到達していくのかを見ていきたい。小さい頃から神と共に生きる教育を受けたジュヌヴィエーヴであるが、神を否定し科学を信仰する新しい教育を行う夫と、宗教が生活の全てを支配する祖母や母親との間にあって、悩み揺れ動く妻ジュヌヴィエーヴを追うことにより、同時代の女性の教育について検証していきたい。

第3章 ジュヌヴィエーヴの迷い

3-1. 肉親からの影響

フランスはモンテーニュやヴォルテールなどの啓蒙思想から、フランス革命を経て、三つの共和国を経験してきた進化する国であり、ヨーロッパの模範となるべきであるとゾラは考えていたが、実際、ゾラがドレフス事件で経験したフランスは、冤罪を許し、正義が不可能な、墮落し、停滞するフランスであった。この現状を見て、その原因の一つは、女性たちと教会の関係にもあると考えたゾラは、同時代の争点の一つであった教会と宗教教育の問題をとりあげる。教会の儀式が女性に与える影響や、教義に従わせることによって女性に、引いては家庭に教会がその権力を行使すること、また懺悔により、女性は監視され、教会がその権力獲得の為に彼らを道具として使っていると考えた¹⁸。そして、それを象徴するのが、狂信的な信者である祖母デュパルク夫人である。ジュヌヴィエーヴは肉親の宗教活動と夫のライクな教育の両方の中で迷うことになるが、そのジュヌヴィエーヴの軌跡が、最も対立する二つの教育を具現しているといえる。ジュヌヴィエーヴの肉親である女性たちと教会の関係は深く、とりわけデュパルク夫人は教会に没落の兆しが見え始める時点で、僧侶たちに見捨てられるが、それでも一人家に閉じこもり十字架を抱いて死ぬ姿は彼女の神への狂信的信仰の深さを物語る。1881年と1882年にジュール・フェリー法が成立し、男女共に無償で義務教育を受けることが法制化されていたが、実際には半数以上がまだ宗教系学校で教育を受けていた。十九世紀に行われていた女性に対する教育は概して保守的で、裕福な社会層に限られていた。しかも女子教育は生きるために必要な、ごく基礎的な科目のみであり、彼女らの教育は家庭教師による教育か、修道院で行われる神を中心とする宗教教育であり、多くの知識を有することは敬遠されていた。「作家にとってペンが必須であるように、女性にとっては縫い針が必須である」と言われるように、知識より生活に密着した実践の方が重視されていた。デュパルク夫人の家は元々教会僧侶関係の衣料品を調達する店を営んでおり、教会の前に位置し、生活全体が教会に密着していた。デュパルク夫人にとって、教会や神への信仰は善であり正義であり、それに対立するものは全て悪という認識であった。この凝り固まった考えは、娘であるベルトラン夫人にも押し付けられ、引き継がれる。自由思想を持っていた夫ベルトランが亡くなり、寡婦となってからは、当時11年生であった娘ジュヌヴィエーヴを連れて、デュパルク夫人の家に身を寄せるが、それ以来母ベルトランはデュパルク夫人に従い、いつも沈黙を守っていた。

ジュヌヴィエーヴはマルクと結婚生活をおくっていたが、母親ベルトランのいるデュパルク夫人の家、肉親が生活する家に娘ルイズを連れて訪れるたびに、経済的援助も含め祖母や母たちの優しさに触れ、

¹⁸ Zola, Émile, *Vérité*, préface, commentaire, notice et notes de Colette Becker et Véronique Lavielle, Livre de Poche, 1995, p. 13. 「ゾラはこの時代のライトモチーフの一つを取り上げる。それは宗教儀式が女性にもたらす神経を高ぶらせる効果、懺悔僧が女性や、ひいては家庭にまで及ぼす影響力、僧侶たちが権力を掌握する為の道具として使う女性の役割など、ゾラは彼の最初の作品から注視している。」とベッケールとラヴィエイユは序説で述べている。

訪れる頻度も増えていく。そして小学校教師として生徒たちの教育に専心するマルクに対し、彼女は空虚感さえ持ち始める。母や祖母をたびたび訪れるようになると、肉親の家の信仰心が醸し出す、神秘的優しさを感じ、彼女を受けとめてくれる親密さに、子供時代の神に守られている安堵感や愛が想起され、徐々にまた信仰心の魅力に飲み込まれていくのである。

ジュヌヴィエーヴは暫くの間、当惑したように見えた。祖母の家で、一晩中ずっと信心深い厳粛な雰囲気の中にと、夫から少しずつ引き離されるような感じが起こる漠然とした不安を、敢えて口に出す勇気はなかった。何かしら少女時代の考え方や感情が蘇って来て、現在の妻として、また母としての生活を破壊してしまうように思えた。しかし、それはほんの身震いのようなものだったし、マルクの優しさに触れると、また明るく安心を取り戻した¹⁹。

狂信的カトリック信者であるデュパルク夫人は孫娘の結婚に結婚当初から、猛反対であり、孫の婿であるマルクの無宗教の考え方に強く対立し、二人の考え方のコントラストが鮮明に強調される。中でも特徴的なのは、ジュヌヴィエーヴの母ベルトラン夫人、祖母デュパルク夫人という肉親からの影響を受けて、ジュヌヴィエーヴに幼い頃からの宗教心が呼び覚まされるようになると、それに反比例してマルクとの現実生活が否定し始められていくのである。

3-2. 感覚的要素

肉親の影響を強く受け、次第に再び教会に引き込まれていくジュヌヴィエーヴであるが、反対に熱愛して結婚をしたマルクに対し、熱情は薄れていく。ジュヌヴィエーヴを再び宗教に引き込むことになったもう一つの要因として、宗教儀式による感覚的要素が挙げられる。マルク夫婦の仲人で師範学校長であるサルヴァンはマルクとジュヌヴィエーヴの仲を修復する為に、説得を試みるが、心変わりしたジュヌヴィエーヴを前にその変貌ぶりに打ちのめされる。彼はマルクにジュヌヴィエーヴの様子をこのように伝えている。

「(略) 確かに、ジュヌヴィエーヴは私の言うことを理解できる状態ではなかった。一つのカトリック教育がそこに再び芽を出す時に、宗教的高揚感が女性の脳の中に引き起こす荒廃はぞっとするほど恐ろしいものである。(中略)²⁰」

サルヴァンは女性の宗教的高揚が女性の脳にもたらす影響を、感覚的で身体的なものであり、理性とはかけ離れていることをジュヌヴィエーヴに認めるのである。宗教の魅力に再びのめり込んでいくジュヌヴィエーヴは、マルクを捨て、娘ルイズを捨て、やがて生まれて来る子供も神を否定するマルクの子供であることを理由に出産後里子に出し、考えは反ユダヤ主義へと変わり、どのような批判精神も、また正義の精神も全く失ってしまうようになる。

コレット・ベッケールとヴェロニック・ラヴィエイユは宗教儀式の特異性を次のように述べている。

ジュヌヴィエーヴはデュパルク夫人と同様、失った或いは実在しない愛情深い生活の埋め合わせを宗教の儀式の中に見いだしている²¹。

¹⁹ *ECNM*, 20, p. 63.

²⁰ *ECNM*, 20, p. 261.

宗教儀式の中に見出すものは、嗅覚や触覚など五感に訴える感覚的な心地よさと陶醉感であり、精神的充足である。宗教儀式である、ミサ、懺悔、聖体拝領などが、今やジュヌヴィエーヴにとって価値あるものとして蘇えりつつあった。

ジュヌヴィエーヴは実家に行くたびに、祖母の家に来る僧侶たちとの交流を深め、ミサや懺悔などの宗教活動に熱心になって行く。懺悔僧も年寄りのカンディエ僧正から、若くて魅力的なテオドーズ長老に代えられジュヌヴィエーヴは宗教活動に夢中になる。一方マルクの方は新教育を続けながら、その成果もあがり自信をつけていく。しかしシモンの無罪を勝ち取る為の闘いを続けるマルクと、信仰に戻ったジュヌヴィエーヴとの溝は深まっていく。そして成長した娘ルイズの教育方針について、ついに二人の意見は真っ向から対立する。それは学校から懺悔に行くことについて聞かされた時である。マルクは今になってはルイズに聖体拝領も、懺悔もさせないし、以前ルイズに洗礼を受けさせたことも後悔していると言うので、ジュヌヴィエーヴは激しく怒り反論する。ジュヌヴィエーヴにとっては、このような宗教儀式に参加しないことは、喜びを引き剥がされると同じ思いであった。

彼女は自分の素晴らしい聖体拝領を思い出した。人生の最も美しい日だった。白い服、御香、大蠟燭が準備され、婚約者としてうっとりとしながら選んだ優しいイエスは、彼女に残った、唯ひとりの、そして比類のない夫であったし、この時、もう天上の喜びしか味あわないと彼女が誓った神への愛であった。自分の娘はこのような至福を奪われ、落ちぶれたもののように、少しも宗教を知らない獣の列にまで墮とされてしまうのだろうか²²。

ジュヌヴィエーヴは思春期に聖体拝領を受け、至高の幸福感を味わった時を回想する。感覚に訴える幻想的な儀式が強烈な印象を与えたのだった。聖体拝領の時に身につける服は、純粹無垢を象徴する白い服であり、白色は1854年に発布された「受胎告知」の神秘性を想起させ、聖母マリアの純粹性を象徴していた。焚かれる香の香りは厳粛な雰囲気醸し出し、大蠟燭の美しい炎の神秘性など五感に訴える儀式はジュヌヴィエーヴを揺さぶり、子供時代に沁み込んだ神への信仰を蘇えらせた。ルイズの聖餐式への出席を望み、天上の他には真実も正義もないとまで主張するジュヌヴィエーヴは、マルクを驚かせ、二人は口論となる。

ジュヌヴィエーヴは怒り、苛立った。「じゃあ、最終的に議論しましょう。貴方が破壊したいのは私の宗教であり、私の神なのです。」

「そうだ。」と彼は叫んだ。「私が闘っているのはカトリックであり、その教育の愚かしさ、その実践の偽善、信仰の墮落、子供や女性に対する凶暴な行為、そしてその社会的害なのだ。(中略) 僕の言うことを聞いてくれ。これが僕たちの娘、ルイズには懺悔に行かせず、聖餐式にも出さない断固とした僕の理由なのだ。(中略)²³」

²¹ Zola Émile, *Vérité*, préface, commentaire, notice et notes de Colette Becker et Véronique Lavielle, Livre de Poche, 1995, p.13. ここで触れられているデュバルク夫人のケースは例えば次のような箇所だと考えられる。「彼女(デュバルク夫人)は信仰の儀式において、お香の香りが立ちこむ中で、祈りが高揚し、聖なる図像の中での金髪のイエスと神秘的な出逢いをする中で、自分の官能の欲求を抑制し、誤魔化し、それを満足させることが出来た。現実には愛する者からの熱狂的抱擁を受けた経験はないが、彼等の傍においては、人が罪を起すことなどあり得ない人間であるから、彼等の息遣いの直中に身を置いて、自分の肉体的親密さをゆだねさえしながら、僧侶たちからの控えめな愛撫に、充分慰めを感じることが出来た。」

²² *ECNM*, 20, p.201.

²³ *ECNM*, 20, p.204.

神の神秘性や神聖さに価値を置き、宗教儀式は娘にとって大切な通過儀礼であるとするジュヌヴィエーヴは、マルクの推し進めるライクな教育とは乖離する秘教的宗教儀式を称賛する。それは視覚や聴覚に訴えるロマン主義的なものであり、理性を求める啓蒙主義とは相反するものである。こうして、子供時代に受けた教育により、ジュヌヴィエーヴはカトリック教の彼方の世界の神秘性に回帰し、マルクの真実を求める新教育とは相反し、二人の結婚生活の亀裂を生んだ。

3-3. 再びマルクのもとに

再び宗教に引き寄せられて、マルクのもとを去り、デュパルク夫人のところに身を寄せたジュヌヴィエーヴであったが、新教育で育った娘のルイーズは二人の食い違いを修復しようと、自分もデュパルク夫人の家に移り住み、愛情と忍耐を持って、母に真実や正義を分らせようと努力する。サルヴァンはデュパルク夫人の家で見たルイーズの様子をマルクにこう告げる。

彼女（ルイーズ）はあなた（マルク）のことは殆ど話さないが、あなたの雰囲気、考え、愛情が甦るようにさせている。彼女はまるであなたの代わりにそこにいて、一刻も無駄にせず、（ジュヌヴィエーヴが）早く妻や母親に戻るようになら、切れた紐を優しい手で再び結び直そうとしている。もし君の奥さんが君の元へ帰ってきたら、彼女を引き戻したのは、健康で、家の平和とも言える力強いこの子供の力であろう²⁴。

マズリーヌ女教師に新教育を受けたルイーズの、母に対する真実への導きと、ルイーズの粘り強い教育力で、次第にジュヌヴィエーヴの考え方が理性的なものへと変化する。幼い頃の宗教心で、絶対的真理として信じていた神の世界であったが、大人になり現実の生活で経験する信仰は、抱いていたものとは異なることを感じるようになる。

これは物語上では丁度、判決が棄却され、再審が行われる時と重なる。多くのシモン派の人々が冤罪を晴らす為に努力したにも関わらず、シモンは再審でも、再び有罪判決を受ける。シモン派陣営の落胆は深刻なもので、マルクもまさに雷に打たれたように身体に身震いを感じ、冷たい恐怖に襲われる。ついにまた不正が勝ったのだ。裁判の翌日、疲労と傷心に疲れ果てたマルクがマイユボアの町に帰宅すると、わずか三行ばかりの手紙が彼を待っていた。

「私はすっかり調書を読みました。そして、公判もつぶさに後を追いました。最も恐ろしい罪を我々は犯したものです。シモンさんには罪はありません。ジュヌヴィエーヴより²⁵」

一転して真実に到達したジュヌヴィエーヴであったが、それはルイーズによる真実への説得、また教会への幻滅に起因する。シモン事件に関し、真犯人がゴルジヤス修道士 frère であると目されていること、証拠品改ざんの為に細工を加えたフィリベン僧侶が更迭され僻地に送られたこと、今ではカンディエ僧正までシモンの無実を公言しているなど、潔白と信じていた僧侶たちに不信感を抱き始めたこと、またジュヌヴィエーヴの元懺悔僧テオドーズ長老が、再審もシモンが有罪判決を受けたのは、信者が賽銭をあげ、神に祈ったからであると喧伝し、今度は、死後天国へ行きたいならば、存命中に證券を買うよう勧めたりした為、ジュヌヴィエーヴは自分の元懺悔僧に幻滅したばかりか、彼によって代表される宗教もまたその神聖さを失うように思えた。マルクの元に帰っていく理由は、偽りと詐欺の天国が崩れたからだった。

²⁴ *ECNM*, 20, p. 261.

²⁵ *ECNM*, 20, p. 278.

ここへ逃げて来た時には、子供時代の夢想や、いろいろな信仰深い若者時代の美しい神秘と、宗教儀式のイエスへの熱い欲望がすっかり甦ってきたけれど、その彼方の神秘に新たに酔おうとすると、そして讚美歌や花々の中で、わが身を全くイエスに捧げようとする、その美しい夢は少しずつ色褪せていって、生身の自分の存在はもう何も満たされないただの失望させる夢に思われてきたの。だから本当の毒というのは、私が最初に受けた教育だったのでしょうか。私がその中で成長してきたこの過ち。それでその後それから目覚めると、私はいろいろと苦しめられました。…自分がこの毒を完全に除去できる日が来る時にしか、自分は治ることはないと思うけれど…²⁶。

ジュヌヴィエーヴはマルクの元へ帰ることを決意する。そして帰ってきたジュヌヴィエーヴと子供達にマルクは歡喜する。

ゾラはジュヌヴィエーヴに、実験的な体験をさせ、それを通し、宗教教育の虚無を味あわせ、真実を求めるライクな教育を体感させたかのように見える。マルクの支えにも拘わらず、子供時代の最初に受けた教育に引き戻され、それを矯正し、苦しい再教育を経て、真実に到達した一つの例といえる。学校教育がどれ程生徒の人格に影響を与えるか、特に幼い子供時代の教育の大切さを物語っている。ゾラは女性教育の必要性を小説の中でも述べているが、男性が仕事をする上で、仕事の共同者として同じレベルの教育が必要だと考えていた。実際教育レベルには男女差があった。1880年には、カミーユ・セ²⁷により、女性の高等教育に関する法律が出来たが、それはアメリカの教育制度を模範とするもので、男女が同等に教育を受けられるよう、また社会的階層の区別なく等しく教育を受けられるよう奨学金の制度を整備するものであった。フランスはこの法案に関しては、ヨーロッパの国々の中では法整備が遅いほうであった。教育は完全にライクなものであるため、若い女性へのモラル防衛の為に宗教教育が必要であるとする家庭には不安を生じさせた。しかしそれは女性の解放であり、社会の解放でもあった。

こうして、心のままに行動し、真実を知って戻ってきたジュヌヴィエーヴは、マルクの伴侶として、また力強い同じ教師として、マルクの事業を前進させることになる。

シモン事件が起こって十五年後判決棄却が決まり、その後再審で再び有罪判決を受け、特赦で放免されるという、ドレフュス事件と同じシモン事件の結末であった。しかしながら、史実のドレフュス事件がゾラの存命中には有罪のまま特赦で放免という状態であった時点で、ゾラはこれを小説に転換したわけであるが、小説の中でのシモン事件については、ゾラのユートピア物語としてその後の展開を大きく膨らませている。その未来に対する希望的予測は予言ともいえるほど史実に合致する点も見られ、ゾラの予知能力の高さに驚かされるが、それは未来社会に対する期待を込めたゾラのメッセージを組み込んでいるからではないかと思われる。また同じ「司法の間違い」である二つの事件を比較すると、ドレフュス事件の状況や要素とは全く違い、軍国主義や国粹主義を問題点として挙げるのではなく、当時最も社会問題となっていた「教育」を焦点とし、視点を変えてフランスの未来を憂い、再構築することに熱意を注ぐ教師の闘いの物語に転換されたのである。小説では事件後、主人公マルクは「長命と栄光」に覆われて、八十歳を超えるまで生き続け、多くの子供達を教育し、社会に送り出していく。

1899年9月9日にドレフュス事件の再審がレンヌで結審されたが、小説ではその後この事件が人々の中でどのように教訓とされ、未来に向かっての試金石になったかを教育進展の成果として提示しているが、その中で二つの例を挙げたい。ひとつはアドリアンの発案による、償いの家であり、もう一つはマルクのひ孫ローズに起こった事件を通した未来への展望である。

²⁶ *CECNM*, 20, p. 297.

²⁷ カミーユ・セはセーヌ県選出の議員(1876年-1881年)であり法学者。その後國務院の一員となる。特に女子中等教育の推進者として知られている。

第4章 後世：未来の子供

4-1. アドリアンたちの造るシモン事件の記念碑

「教育」は真実と正義のひとつの世界を産み出すことに貢献するが、しかしまたそれは世代間の衝突の原因にもなる。シモン事件が起こった時、シモンの生徒の親ドロワールは偏狭な精神の石工職人であり、真実に遠い人物であった。その息子オーギュスト・ドロワールは新教育で少しは進歩がみられたが、大人になった時にもシモン事件に関しては捏造した嘘の新聞の記事を信じてマルクを失望させていた。しかしオーギュストの息子である、アドリアンは評判の良い建築家に成長し、若くして町会議員でもあった。彼はマイユボワの町の為に、シモンへの公の償いの印として家を建設することを提案する。再審でも有罪判決を受け、その後特赦で放免されたシモンに対し、若い世代の示すこのような考え方は「教育」による人間性の成果と言える。

「実はこうなのです、(マルク)先生。今の若者達の多くは、あの恐ろしい不正を許し、共犯にさえなって、シモンさんに有罪判決が下されるままにしたことを、修復してしまわない限り、マイユボワという町の名に、大きな不名誉を残すことになるだろうと考えています。シモンさんがただ法律上の無罪放免だけでは十分でなく、私たち、虐待者の子や孫が、私たちの父親たちの間違いを認め、それを消してしまう厳しい義務があるのです。(中略)昨夜も、私のお祖父さん、伯父さん達が集まっている私の父の家で、彼らにまた私は大声で云いました。「ちょっと考えれば避けられる筈であったのに、どうしてあんな事、あんな極悪非道なことが出来たのですか？」と聞いたのですが、彼らはいつものように曖昧な身振りをして、知らなかったとか、知ることができなかったのだと言って答えていました²⁸。

アドリアンの言葉はドレフュス事件に対するゾラの主張を代弁しているかのように見える。連帯責任を自覚せず、曖昧なままに放置する無責任さは、未来のユートピアを構成するメンタリティーとはかけ離れる。有罪判決を下した後、特赦で放免という終結に対し、明確にこの事件のことを歴史に刻み、歴史的な反省として心に残すために「記念碑」として子子孫孫まで伝え、教訓とするよう主張したと言える。

日和見主義な小役人サヴェンの息子、ジュール・サヴェンは昔マルクの生徒であったが、今や町長になっており、アドリアンの提案を審議し、マイユボワの町全部の同意を得て、シモンに対し公の償いをする。新しい世代の人々のシモンへの改悛の気持ちはマルクを感動させ、マルクの教育による「真実の種」が実ったことを感じるのである。

「(中略)私の計画は町の名のもとに、もう一つの家、宮殿とはいきませんが、明るくて楽しい質素な家を建てて差し上げ、同郷人の尊敬と優しさを受けながら余生を過ごせるような家を建てるように、町議会の審議にかけることです。金銭上から見れば些細なことにすぎませんが、こうしてでも、シモンさんに私たちの親しい心持を表わしたいのです²⁹。

前世代の誤りを認め、無罪でありながら、苦しみの日々を送らせ、今もなおピレネーの山奥で療養を余儀なくされたシモンに対して、せめて自分たちが無償で建て、贈呈する家で余生を過ごすことを立案し実行する、孫世代の生徒たちに人間性を尊重する感覚が育ったのである。前世代の犯した間違いを、闇に葬

²⁸ *ECNM*, 20, p. 352.

²⁹ *ECNM*, 20, p. 352.

るのではなく、二度とこのような間違いを犯さない社会を目指し、歴史に反省を刻むために、記念碑として建てるシモンの家はユートピア社会を構成する人間性を育てた「教育」の勝利と言える。孫の世代になりシモンの名誉は回復され教育と共に正義が可能になったのだ。

そして家の前には碑銘を置く。

「ここには碑銘でも置くのかね」とマルクは尋ねた。

「はい、この家は碑銘として建てられるのです。私が町会に提案しようと思う碑銘です。『無罪でありながら苦しみを受けた「教師シモン」へ、マイユボワの町より、真理と正義のための償いとして、これを送る』と書こうかと思えます。そして『彼の迫害者の子孫たちより』と書きたいと思えます³⁰。」

それに対し、アドリアンの妻クレールの両親は、夫がそのような事をするのを止めるようなぜ促さないのかと問うが、クレールは、この銘は自分も一緒に考えたものだと言っている。

4-2. ローズ事件：マルクを越えて

シモン事件が起きてから五十年後に起こった事件をゾラは未来予測として小説の筋書きに取り入れ、同じような事件でありながら、人々の事件に対する反応や対応がシモン事件とは違い、司法の過ちから起る冤罪事件を回避できたこと、それは初等教育によりフランスの国民性が変わってきた成果として描いている。五十年に亘るマルクたちの長い教育闘争の歴史があって、真実を求める「人間性」が育ち、ローズの事件がシモン事件のような冤罪を避けられたという意味において教育成果は高く評価されるべきであろう。

新しい世代が生まれるごとに、国民の教育環境が整い「人間性」が進展していくことが示される。作品の中での子供たちの教育状況は、師範学校長であったサルヴァンの改革事業を起点とし、マルクを始め、同じ志の教師たちにより引き継がれ強化され、教育は少しずつ解放されていき、浄化されていく。以前のフランスの教育界は、宗教学校とライシテの公立学校との対立により、国や地方の中は二つに分断されていた。小さな村や町などの地域においても、この対立に起因する影響は大きく、また社会的には上流階級と中流階級や貧しい労働者階級とは教育格差があり、ゾラの言う世界の解放者としての共和国、フランスとは乖離していた。しかし教育改革の努力を果たし、少しずつ真実を求める教育が向上し、フランス全体が変わっていくという、ユートピア的フランスの実現をゾラは希望的確信を持ちつつ予測していたように見える。実際ゾラが予測した通り、ゾラの死後1905年には政教分離法などの法律整備により、宗教学校は公的には排除され、僧侶は国から俸給も途絶え、逆に悲惨であった公立学校教師の労働条件が良くなるなど、公的教育環境は改善される。また法律は国民に特権階級を認めず、生まれたものを全てひとつの可能性として歓迎し、初等教育の無償化、義務化などを行い、子供は国家の利益の為に教育されるべきであると説いていた。

ローズに起こった事件とは、子供が犠牲となるという点でシモン事件と同じであるが、その後の展開が異なっている。司法の誤りにより捕縛され、人生の大半を苦しみで費やしたシモンと比較すると、ローズ事件の場合は誤って捕縛される危険があったにも関わらず、当局の冷静な捜査や住民の判断力により、危うく罪を着せられることを免れた、ローズの父親フランソワの話である。

ローズはマルクの子孫にあたる。父親フランソワはマルクの子孫であり、妻テレーズと共にマイユボワで小学校教育に従事していたが、ある日突然、気ままに自由な暮らしをしていた美しい娘コレットに魅かれ、熱烈な恋に落ちる。フランソワの妻テレーズは、偶然彼等の不倫を目撃し、彼女は悩んだ末に両親や祖父

³⁰ *CECNM*, 20, p. 353.

母に相談し、夫と別れ、彼に自由を与える事を申し出る。マルクが孫であるフランソワを問いただすと、彼は自分の過ちを告白するが、理性では制御できない自分の熱情にまた打ち負かされるかも知れないと恐れていた。マルクは教育が向上し、古い過誤から解放された新しい時代の教育を受けた自分の孫の家庭に、新しい苦悩、すなわち愛の苦悩が現れるのを見て、知識ばかりを誇りにし、そればかりを強みと思ってはならないことを知る。

やがて休暇になり、フランソワはコレットと共に突然姿を消す。そのような中で事件が起こり、シモン事件とほぼ同じ展開が示される。ローズが帰宅途中に、小さな広場で暴漢に襲われる。シモン事件と同様、被害者は幼い子供であった。第一発見者であるマルスイエは、被害者の近くにFのイニシャルのついたハンカチを見つける。この証拠品もシモン事件の花押のイニシャルと共通している。少女は動かず倒れていたが、腕をねじられ骨折し、痛さで気を失っていた。犯人の捜査が始まるが、ローズは自分を抱えて連れて行こうとしたのは、髭と帽子により父のフランソワに見えたと言証する。また証拠品の猿ぐつわに使ったと思われるハンカチはテレーズが以前、夫に買ったものの一枚であった。マルスイエは暗がりであったので、犯人の顔は全く見えなかったと言証する。このような犯行状況の中で、フランソワが犯人と思われ、シモンの時のように捕縛される危険性が考えられた。しかし人々は証言を拒否することなく、真実を追求することに協力する。証拠品のハンカチについては、売った側の洋品店の店主でマズリーヌ先生の生徒であったランドワ姉妹が帳簿を洗い出し、もう一人のハンカチ購入者を捜し出す。またマルクは何かを呟きながら逃げて行ったと口を滑らせたマルスイエを問い詰め、最後には真実の告白を引き出し、コレットの兄フォスティンが犯人であることを突止める。不倫で母と共に苦しい目にあわされた幼い娘ローズは、暗がりの中で犯人の変装に気付かず、犯人は父フランソワと思い込んだが、実際は付け髭をつけ、山高帽を被り仕組んだ犯行であった。人々は冷静な態度でこの事件に対処したため、前のシモン事件と同じ轍を踏まなかったのである。マルスイエは自分が共犯者に見られるのを恐れて真実を告白したが、マルクが「君は善人だと分っていた」と、感謝して褒めると、マルスイエは、マイユボワのジュリック先生の生徒であったので、真実を愛するように教え込まれたのだと告げる。

今やローマが征服され、修道会が消えようとしており、もはやイエズス会僧侶たちは、人々の考えを曇らせたり、行動を悪く導いたりすることが出来なくなっており、人々は理性を働かせ、意識を向上させ、ますます心は解放されていた。人々が良識を持ち、論理的に説明することができたのは、他にもない、それはただ人々がついに教育され、古くからの誤りから解放され、真理や正義を会得でき始めるようになったということである³¹。

そしてまた、四世代の家族が集まった時、大祖父マルクはテレーズに対し、孫のフランソワを許し、また愛すようにと説得する。しかし、マルクの願いに対し、その願いは貴方の理性からではなく、優しい心からの出たものであると言い、毅然と「これは二人だけの問題であるから」と、マルクの干渉をテレーズは断るのである。これは、女性にも新しい教育がいきわたり、男性と同様に自由で妥協を許さない、自立した生き方の考えが育っていることを示している。

あなたが私たちから苦しみを除いてやりたい気持ちはわかります。でも苦しみとは永遠にあるのだと認めましょうよ。それは私たちの上に、生きることの知られざる仕事のひとつとしてあるのです。勝ち取ることができたであろう全ての健康や、全ての良識があったとしても、いつも私たちの可哀想な心は血を流すでしょうし、激しく募る熱情の時にはそれらを引き剥がしてしまうでしょう。そしてそ

³¹ *CECNM*, 20, p. 388.

れが幸福には多分、必要な刺激なのです³²。

ゾラは神を絶対者として従順に従うことを女性や子供に課した古来の宗教教育に反対していたが、公立学校における、男女別の初等教育にも疑問を持ち、共学を理想としていた。男性に自由に活動させるためには、女性も同じように自由な思想を持っている方が生きる為に効果的であると述べている。テレーズの言葉は、ゾラが女性の生きる姿勢の多様性と自立性を予想した、教育成果の展望であり、現代の女性の生き方を先取りしていると言えるのではないだろうか。

おわりに

ドレフュス事件をきっかけとして、編み出された『真実』は、結果的に遺作となったが、ゾラの歴史観を感じさせる、最も同時代の社会問題と密着した、未来に希望を託した作品であることを確認した。ドレフュス事件の単なる置き換えに留まらず、その範疇を遥かに超えた、未来に向けてのゾラの強い信念と希望のメッセージを感じることが出来た。実際に事件を経て、共和国の理想とはかけ離れた現実を実感し、このような現状を打破することを思考した結果の作品であった。実際十数年に渡ったドレフュス事件の闘争を経て、理想社会の構築には、真実を求める「人間性」を作る必要性、そのための手段として「教育」が重要であり、それを阻む要素に立ち向い、「前進する」というゾラの意志を強く感じる作品であることを見てきた。それは社会を「教育」で変えるという思想であり、長い年月を要する大きな作業であるが、粘り強く実行していこうとする主人公の生き方であったし、その姿勢は「一行も書かない日はない」というゾラ自身の座右の銘と通じるものにも感じられた。『真実』における主人公は、理想の共和国主義的社会、つまり「自由」で「友愛のある」「平等」な世界を「教育」で実現するというものであり、ゾラの考えるユートピア社会には不可欠な人々のモラルと「人間性」であったので、どうしても福音書叢書に加える必要があったと思われる。

再び宗教の魅力に引き戻されそうになる妻のジュヌヴィエーヴには、その子供時代の宗教教育の爪痕を消し、また登場人物はライシテ教育を通して真実の人間への変革が可能であり、新しい世代の人々を創出しようとする主人公の情熱が強く描かれ、実現されていくことを確認した。

ゾラの歴史家的社会の捉え方、現実の把握と改善への意欲、ゾラのユートピアへと続く未来への予測は、かなりの点で歴史と合致していたと言える。ゾラの理想社会への希求とその手法、また時代を先取る力の強いゾラ思想と生き方は、一九世紀末の「近代性」そのものといえるのではないだろうか。

参考文献

- Alain Pagès, *Émile Zola, De J'accuse au Panthéon*, Lucien Souny, 2008.
 Zola, Émile, *Fécondité*, 1899, In Zola, Émile, *Œuvres Complètes*, tome 18, Mitterand Henri (s.l.d.), Nouveau Monde, 2008.
 Zola, Émile, *Vérité*, 1902, In Zola, Émile, *Œuvres Complètes*, tome 20, Mitterand Henri (s.l.d.), Nouveau Monde, 2009.
 Zola, Émile, *Correspondance*, tome X, Les Presse de l'Université de Montréal, 1995.
 Zola, Émile, «Ébauche», au *Œuvres, manuscrits et dossiers préparatoires. Les Évangiles. Vérité*. Bibliothèque nationale, *manuscrits*.
 Béatrice Laville, *Pour Vérité. Histoire d'une rencontre : Zola et Dauvé*, Les Cahiers Naturalistes n.64, 1990.
 Zola, Émile, *Vérité*, 1902, In Zola, Émile, *Vérité*, préface, commentaire, notice et notes de Colette Becker et Véronique Lavielle, Livre de Poche, 1955.
 Textes Réunis par Auguste Dezalay, *Zola sans frontières*, Presses Universitaires de Strasbourg, 1966.
 Henri Mitterand, *Zola tome III, L'honneur*, Fayard, 2002.
 Henri Mitterand, *Zola, tel qu'en lui-même*, Presses Universitaires de France, 2009.

³² *ŒCNM*, 20, p. 391.

Colette Becker, Gina Gourdin-Servenière, Véronique Lavielle, *Dictionnaire d'Émile Zola*, Bouquins, 1993.

菅野賢治、ドレフュス事件の中の科学、青土社、2002.

エミール・ゾラ選集（上）（下）『真理』、中原光之訳、本の友社、2002年復刻版

宮川朗子、ゾラ『真実（Vérité）』における歴史とユートピア、広島大学大学院文学研究論集第73巻、2013.